Case 5 ▶▶▶

総務部　再犯防止対策室　主任捜査官

国家公務員一般職（大卒程度）採用・法学部出身・入庁３２年目・女性

01 PAST

――結束を生み出し、正義を支える

Q：自分のどのような性格が、現在の業務に生かされていると思いますか。

A：これまでを振り返ってみると、私の強みは**「サポート力」**だと思います。周囲の状況を冷静に観察し、他者が最高のパフォーマンスを発揮できるように環境を整えるよう心がけてきました。

検察事務官として、常に移り変わる状況を把握しながら、必要な情報を収集・整理することに加え、全体が一丸となって動けるように、自ら積極的にコミュニケーションをとる。こうした役割を果たすことで、**組織の結束が高まり、業務が円滑に進んで、「社会正義の実現」という検察組織の目的に少しでも近づけたかな**と思えたとき、充実しているなと感じます。特に再犯防止の現場では、検察庁内部だけでなく、行政機関や福祉機関などの外部の方々との緊密な連携が欠かせません。**支援対象者が何を必要としているかをくみ取り、外部の方々との円滑な橋渡し役を担う**ことで、支援対象者の更生に向けた支援体制が形作られていく手応えを感じています。**地道な調整の積み重ねが、生きづらさゆえの再犯が減り、安心・安全な社会の実現につながる**と信じて、日々業務に取り組んでいます。

「誰かのために、組織のために。その献身的な姿勢こそが、私の誇りです。」

02 PRESENT

——連鎖する「助け合い」の精神

Q：現在の業務に従事する中で、やりがいを感じる瞬間はありますか。

A：**行き場のない不安を抱えた方が、未来に希望を見いだしたとき**です。生きづらさを抱え、孤独の中にいた人が、福祉支援の提案によって、ほっとした表情を見せてくれる。その表情を見たとき、また、感謝の言葉をいただいたときに、いつも胸が熱くなります。**相手が罪を犯していたとしても、一人の人間として向き合う大切さ**を日々実感しています。

Q：検察事務官として働く中で、困難な状況に陥った場合、どのように乗り越えてきましたか。

A：子供が小さかった頃は特に、組織全体の**「サポートの輪」**に救われたことが何度もありました。**上司が快く業務量を調整してくれたり**、**同僚が自然と手を差し伸べてくれたり**。周囲の支えがあったからこそ、私は自分のキャリアを諦めることなく、今日まで働き続けることができました。**大規模庁である大阪地検には、多様な背景を持つ職員が数多く在籍**しています。だからこそ、**お互いの事情を尊重し、助け合う文化が自然と根付いている**のだと感じます。**職員一人ひとりの人生を支える組織風土があり、その安心感の中で他ではできない分野の業務に携われる**ことが、大阪地検の大きな魅力の一つです。

「他人の人生に深く関わる仕事だからこそ、まずは自分自身の人生を慈しむところから。大阪地検の助け合いの文化が、『人の温かみ』 という、この仕事をする上で大切にすべき感覚に気づかせてくれました。」

03 FUTURE

——受けた恩を、未来の世代へ

Q：これまでの経験を踏まえて、将来どのように検察庁に貢献していきたいですか。

A：**誰もがいきいきと働ける環境**を整えていきたいです。先にも述べましたが、私はこれまでの検察事務官人生で数え切れないほどのサポートを受けてきました。次は私が、若手職員にそうしたサポートの輪を広げていく番です。検察庁には幅広い年代の職員が在籍しており、子育てや介護など、人によって置かれている状況は様々です。**全ての職員が、自分らしく、最高のパフォーマンスを発揮できる環境**をつくりたい。大阪地検で働く職員には、**何かを諦めることなく、守るべきものを大切にしながら、明るい未来を切り拓いていってほしい**と願っています。

私が理想とするのは、**単なる制度の利用に留まらず、心理的な壁を感じることなく助け合える組織の形**です。これからは上司として、周囲の職員の小さな声に耳を傾け、一人ひとりが抱える不安を解消していきたいと考えています。**職員が私生活を大切にしながら、検察事務官としての専門性を存分に発揮できれば、それは組織全体の強靭さにも繋がります**。支え合いのバトンを次世代へと繋ぎ、誰もが「この職場で良かった」と心から思える大阪地検を築いていくため、これまで支えてくださった方への感謝を原動力に一歩ずつ歩んでいきたいと思っています。

「誰もが心にゆとりを持って、いきいきと過ごせる職場環境を整えることで、『今度は私が助けたい』という気持ちが生まれる。その気持ちが、再犯防止を推進するための第一歩になるのではないでしょうか。」